

# AIの芸術制作と「人間性」 AIによって「人間」は変わるのか？

## 日時

2020年1月25日（土）14:00～17:30（予定）

## 会場

立命館大学 創思館 カンファレンスルーム

## シンポジウム・プログラム

### 開催趣旨

西澤忠志（立命館大学 先端総合学術研究科一貫制博士課程）

### 講演

中ザワヒデキ（美術家 人工知能美学芸術研究会）

「人工知能が真に鑑賞し創作し、  
人間の美学と芸術が変貌する」

谷口忠大（立命館大学 情報理工学部教授）

「記号創発ロボティクスによる人間と表象の理解」

## パネルディスカッション

中ザワヒデキ

谷口忠大

千葉雅也（立命館大学 先端総合学術研究科准教授）

入退場自由、事前申し込み不要

主催 表象文化論研究会

問い合わせ（Mail） [lt0412hv@ed.ritsumeai.ac.jp](mailto:lt0412hv@ed.ritsumeai.ac.jp)（西澤）



## 中ザワヒデキ

美術家。1963年、新潟県生まれ。千葉大学医学部卒。1990年代の「バカCG」を経て、2000年「方法主義宣言」、2010年「新・方法主義宣言」、2016年「人工知能美学芸術宣言」。3Dプリンタ関連特許、著書『現代美術史日本篇 1945-2014』、CD『中ザワヒデキ音楽作品集』。文化庁メディア芸術祭審査委員。人工知能美学芸術研究会発起人代表。

### 人工知能が真に鑑賞し創作し、人間の美学と芸術が変貌する

現行の人工知能はただの自動化プログラムに過ぎず、人間の道具以上のものではない。ここから、「ゆえに人工知能の不穩視は馬鹿げている」とする態度と、「ゆえに人工知能の語感に内在する不穩性を奪い返さなくてはならない」とする態度の両者が導かれる。美術家としては反芸術を標榜したい演者の立場は後者である。ここで、「美の鑑賞」や「芸術の創作」は人間にしかできず、逆にそれができるからこそ人間なのだという、人間の排他的な自己肯定の拠り所とされがちな項目の筆頭である。とすれば「人工知能が真に鑑賞し創作する」という事態こそ、必要があるかどうかには拘わらず、あるいはそれが実現可能かどうかには拘わらず、追求されなければならないものの最終形である。そのためには最低限、人工知能は美意識と自意識を持たなければならず、評価関数を自ら書いて更新し続けるようにならねばならず、また、人間にとってのそうした「他者」でなければならない。



## 谷口忠大

立命館大学情報理工学部教授、パナソニック客員総括主幹技師。2006年京都大学工学研究科博士課程修了。博士（工学）。2005年より学術振興会特別研究員（DC2）、2006年より同（PD）。2008年より立命館大学情報理工学部助教、2010年より同准教授。2015年より2016年までImperial College London客員准教授を経て現職。専門は、創発システム、人工知能、ロボティクス、コミュニティ場のメカニズムデザイン。書評合戦ビブリオバトルの発案者としても知られる。一般社団法人ビブリオバトル協会代表理事。主な著書として『コミュニケーションするロボットは創れるか』、『ビブリオバトル』、『記号創発ロボティクス』、『イラストで学ぶ人工知能概論』などがある。

### 記号創発ロボティクスによる人間と表象の理解

人間の知能の一部を切り取り構成するのが人工知能（AI）の研究であり、2010年代はディープラーニングを代表とした機械学習の発展により人工知能ということばの意味が書き換えられた10年であった。一方で、人工知能の研究は人間の知能を構成的に表現することで認知システムとしての人間理解を進めるという側面がある。筆者らが推進する記号創発ロボティクスは、人間の扱う表象を支える認知システムと社会システムのカップリングとしての記号創発システムをその思想的前提とし、ボトムアップな構成により人間と表象の理解を進めるものである。本発表では、人工知能と記号創発ロボティクスの現状に関して概説し、さらなる議論のための話題提供を行う。